
黄泉桜

月藤 琳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄泉桜

【Nコード】

N7931U

【作者名】

月藤 琳

【あらすじ】

闇に魅入られて眠りに付いた双子の妹を目覚めさせるために妖刀片手に闇を狩る。

そんな彼女の周りには界のはざまの住人である青年、妖刀に眠る少女、冥界府在籍の少年などはたから見れば共通点のないものたちが集まっている。

しかし彼らは遙か遠い昔から強い糸くきずな>で結ばれていた。

浄化の力を持つ双子の妹と完璧集団な幼馴染とのすれ違いが解消さ

れる日は果してやってくるのだろうか……。

タイトルは「リラと満月」さまよりお借りしました。サイトから転載。

第一章完結、第二章は未定です。

つれない態度と触れたがる指先

「紅桜」

名を呼べば目の前に現れる刀。
柄をつかみ鞘を外すと月の光を浴びて紅い刀身が光る。

「あたしの前に出たこと、後悔しなさい」

目の前に漂う闇を一刀両断した。
他に闇の気配がないことを確認してから鞘に収めると、倒れてい
る人の無事を確認してその場を去った。

「まだ、足りない……………」

あの子が闇に見入られ魂が眠っている状態だと分かっただけですぐに蔵
の書物を読み漁った。

答えが出なくていろいろと危ういところを鶴に助けられた。
人間界と冥界の間に存在するはざまの住人で幼い頃からあたしの
話し相手になってくれた。

「必ず助けるから」

同じ日にこの世界に生を受けた双子の妹。

誰からも愛される笑顔と魅力を持ち、天使と呼ばれるほど愛らしく、聖女と呼ばれるほど清らかで純粹。

あたしとはとっても正反対なあの子の周りにはいつもたくさんの方が居た。

彼らからあの子を奪ってしまったのはあたしなのだからあたしが罪を償うのは当然のこと。

「愛梨は怒るかな。いつも愛梨だけあたしのこと心配してくれたけど、逆効果なのよ？ みーんな、貴方の気を惹きたくてに。そのせいで幼馴染たちにも睨まれたりしたんだから」

これまた容姿の整った奴らで構成されている。

その幼馴染たちが騎士みたいな形で絶対の忠誠を誓い、愛梨を害するものを遠ざけてきた。

そんな彼らからしたらあの日は何やんでも悔やみきれないだろう。なにせ自分たちの目に見えない場所であの子は眠りについたのだ。

「頑張るから。またあいつらと笑い会って。ね？」

眠る愛梨の頭を優しく撫でると自室へと戻った。

もう時刻は零時を過ぎていて今日になっている。

普通に学校に通っている学生なのになんていまさらだ。

「おーい、御巫。そろそろ起きないと先生まじで泣くぞー」

ほとんど寝ずに学校に来るので学校では大半机に突っ伏して寝ている。

何度注意されても変わることは無く起きているほうが奇跡と呼ばれるほど。

「小鳥遊、お前幼馴染だろ。ちょっと起こしてくれ」

「お断りします」

聞こえてるから起きてはいるんだけど顔をあげない。

幼馴染で唯一同じクラスの小鳥遊たかなし颯太は愛梨関連であたしのことが大嫌いだから起こすなんてありえない。

そして幼馴染と呼ばれることさえ嫌っている。

「両隣、勇気のあるヤツ起こせ。俺のボーナスに関わるんだ・・・
っ！」

そんなこと公言しても良いのか、先生。

学級委員長でもある小鳥遊があたしの存在を拒否してるからそんなつわもの居るはずがない。

「御巫、生徒指導室」

授業の終了のチャイムが鳴って諦めたようにそう告げられてひらと手を振って答えた。

次の移動教室のために人が教室を出て行き、大体居なくなった頃に顔をあげた。

「恥さらしが」

わざわざ人の横を通り過ぎていく小鳥遊の吐いた言葉にも反応せず立ち上がるとなにも持たずに教室を出た。

眠っていても成績は一定のところから落ちないので呼び出し程度で済んでいた。

それ以前に親が呼び出されたところで用件があたしじゃ来るはずないし。

「失礼しまーす」

毎回呆れた表情であたしを出迎える先生は哀愁漂っていた。

「やっぱり今度も理由は同じか」
「はい」

毎日夜更かししているにしてもその理由は何だと前に問われて答えた。

正義の味方気取ってますと。

「俺はお前が無事に進級できるか心配なんだが」
「大丈夫ですよ、先生」

そんな心配は本人がしていないし留年となればすぐに辞めるだろう。

「気をつけろよ。いつまでもこのままでいられると思うな」
「分かってます」

あの子から比べればあたしは遥かに劣る。

一般人から比べればほぼ全てが秀でている輝かしいあの両親の子なのに。

幼馴染たちが揃えばどこそのアイドルグループだと言わんばかりの華やかさ。

そういえばファンクラブもあるらしいけど彼らの唯一の汚点は間違いなくあたしだろう。

「先生、席替えしませんか。あたしが誰からも干渉されないような場所にいればクラスは安泰だと思っんです」

事実学校を牛耳っているのはその完璧集団の所属する生徒会。
ぶっちゃけ転校しようとも考えている。

あの時あたしがちゃんとあの子の手を握っていたら。

あの子が闇に魅入られることはなかった。

ひとりで眠りにつくことだってなかった。

貴方が目覚めるのを待っている人たちがたくさん居る。

ごめん、ごめんね。

だからあたし、頑張るから。

何者にも僕らを引き離せない

イライラとしながら生徒会室へと向かう。

すれ違う生徒たちが青ざめて両側へと寄っていく。

荒々しく生徒会室の扉を開けるとソファに座り込んだ。

「もう少し静かに開けられないのか」

「まあ不機嫌な理由なんて聞かなくても分かるけどね。愛世でしょ」

俺たちのまとめ役でありこの学校の生徒会長である若狹理皇^{わかたけりみ}。

一番ファンクラブの人数が多く生徒のみならず教員まで手中に治めている。

誰から見ても人の先頭に立つのが当たり前だというほどのカリスマ性。

その容姿もそれを引き立たせている。

暴走しやすい幼馴染たちの中で敵に回したくないヤツNO・2の副会長の関原若^{せきはらわか}。

一番の頭脳派で情報収集の一手を引き受けている。

見た目から温和で人が良さそうに見えるが性格ははっきり言って非道。

自分の許容範囲内のことであれば黙ってみていることが多いが度を越せば修羅を見る。

肉体的ではなく精神的に攻めるのがこいつの怖いところだ。

ほかにもう二人居るが今日はまだ来ていない。

「学校に居る間の大半が眠ってるなんて今までじゃありえないよ」
「調べは付かないのか」
「まったく。尻尾さえつかめないなんて初めてだ。さすが愛世ってところかな」

のほほんとした口調で言うが問題なのはあいつが出歩いていることだ。

「なぜ誰も注意しない。明らかにおかしいだろ!？」
「証拠がない。付けさせてもいつも途中でまかれるんだ」

あれにそこまでのことが出来るか？
若に仕えてる連中は一級の人間たちだぞ。

「愛世が何のために出歩いているのかそれさえ分かれば満足なんだろう？」
「俺たちが見張るって言うのか」
「それで目的がわかって納得するのならな」

言われなくともそうするつもりだった。

「遅れてすまない」

「お耳に入れておきたい話があるのですがよろしいですか？」

残りの二人もやってきた。

「話せ」

「闇が不穏な動きを見せているそうです」

話を始めたのは会計を務める創納^{きすな}絢^{あやひこ}人。

丁寧な身のこなしと口調で執事と呼ばれている。

誰に対してもその態度を変えることがなく接することが出来るのは本物の執事な父親を見て育ったからだろう。

「闇が？このところそれほど現れてはいなかったと思うが」

「人の目に視えるほどの闇なら僕たちに話が伝わってこないなんて可笑しいよ」

闇は人の心の隙間に付け入る。

そしてその人間の負の感情を増幅させて操り悪さをする。

その悪さも取り付かれた人間の負の感情がどれほどのものかにもよる。

「反応のあった場所に向かうとすでに闇の姿はなく、操られていたと思われる人物が倒れているのだそうです」

「つまり誰かが倒したか変わりに憑かれたということではないか」

最後の一人は会計を務める青天颯。あまのやじり はちて
年の割りに落ち着いていてよく年上に間違われる。
それも道場の師範代である厳格な祖父に育てられたからだ。
護るべきもののために強くなる、それが颯の口癖。

「そんなことが頻発しているのは確かです。誰かが倒しているのだとしたら一体誰がどのようにして？ 私たちのような能力持ちでない限りは……」

「問題は誰が何のためにそれをしているかだ」

「愛世のことは後回しだ。闇のほうを優先しろ」

愛梨を捕らえている闇を見つけることの方が優先。
手がかりは一向にないのだ。

「今日も呼び出されていたようですね。生徒指導室から出てくるのを見かけました」

「ひとりでなにをしているのか。愛世は愛梨と違ってなんの力も持っていないというのに」

聖女と呼ばれるだけの力を愛梨は持っていた。
闇を払う浄化の力。

俺たちが護るべきだったのに俺たちの見ていない場所で闇に魅入られた。

「誰かひとりが愛世のところに残ればいいんじゃないかな。同じ部屋に居れば早々出歩けないでしょ」

「な、なぜわざわざ同室にいる必要がある」

「その方が手っ取り早いから。あ、でも何があっても文句はなしね？」

若の言葉に室内が凍りついた。

「お互い年頃だしなにかあっても可笑しくはないよ。あれでも・・・その可能性を見逃してたなんて！もし愛世が夜な夜な僕たちの与り知らぬ奴と密会なんてしてたらどうするのさ！！？」

珍しく取り乱したような若の言葉に一瞬にして時間が戻る。

「どっちも最優先にしろ。もしも愛世にそんな影があったら、即刻消せ」

「確かに承りました」

「了解した」

知らないのは本人だけで実は愛世も幼馴染たちにとっては護るべき対象なのだ。

気付けば自分たちの手元を離れ並大抵では縮まらぬ距離を置かれてしまった。

手の届く距離にいるのに、視界の範囲内に居るのにもかかわらず

まるで塵気楼のように捕らえておけない。

本人は嫌われていると思っっているので余計に距離は縮まらない。
それがどれほどもどかしいことか。

張り上げた声があなたに届く保証などどこにもない

なにやら煩わしいものが周囲に増えた気がする。

監視されているのは分かっていた。

毎回撒くけどそうしているうちに幼馴染たちが出動しそう。

「16歳の誕生日までには」

なんとなくでもその日までにはあの子を目覚めさせる。

だから周りがどうしようよとあたしには関係ない。

今日も今日とて夜の街へと降り立った。

「こんばんは」

気配もなく目の前に現れた人辺りの良い笑みを浮かべる少年に眉をしかめる。

「そんな怖い顔しないで。僕は君の敵じゃない」

地面から数十cmほど浮いている。

人ではないというのはその雰囲気でも分かる。

「闇に魅入られた双子の妹を目覚めさせるために闇を狩っている。けど妹さんを捕らえた闇に関しては全然手がかりがない。違う？」
「……………ノーコメント。」

こんな得体の知れない人に話すわけがない。

「あたしになんのよう」

「あの紅が認めた適合者を見に来たって言うのが正しいかな」

紅というのはあたしが持っている妖刀紅桜に眠っている存在の名前。

じゃあこの人は冥界の人間？

少年はふわりと地面に足をつけた。

「初めまして僕は冥界府所属の漉芭ろくはだよ」

「冥界府？ なに、それ」

「君たちの世界でいう役所みたいなものかな。僕はその役人つてこと。君が闇を狩ってくれているお陰でこっちもやっと時間が取れて会いにくることができたんだ。御巫愛世みかなぎ あいせさん」

前に鵠に聞いていたことを思い出した。

この世界は上に天上界と呼ばれる神々の住む世界があつて下に冥界と呼ばれる死者の世界があると。

「ご丁寧の名刺まで出されたので一応受け取っておいた。」

「君の眠りについてる妹さんに会わせてもらえないかな。痕跡や

残留思念とかを見つけられたら妹さんを捕らえた闇に関して、情報を上げられるかもしれない。」

「その見返りは」

「話が早くて助かるよ。その話は妹さんのところでしょっか」

今日の闇退治は早々切り上げて自宅へと戻ってきた。

どうやら漉芭の姿はあかし以外には見えないみたい。

あたししか見えないように他の人たちの認識からはずらしていると言っていたけどけっこう凄い人？

部屋に連れてきた漉芭は愛梨の部屋を見回していた。

「この件については冥界府でも話題に上がったんだ。なにせ捕らわれたのは浄化の力を持った少女だったからね」

それがあたしたちが決別することになった理由だった。

愛梨も幼馴染たちも特別な能力を持っていたけどあかしだけなにも持っていないかった。

生まれながらにすでに優劣が決められていたようなものじゃないかと幼心で格の違いを知った。

「この部屋には様々な感情が入り混じっている。一番強く彼女にまわりついているのは、嫉妬、の感情。それがあの子を覆っているから君たちの声があの子には届かないみたいだ」

越えられない壁を悟ったとき一瞬でもあたしに宿った感情。

けど愛梨はあたしの半身だからこそそんな感情を向けたくなくてあたしは距離を置くことを選んだ。

「それで愛梨を捕らえた闇は見つけれられそうなの」

「ねえ、愛世。妹さんが闇に魅入られたのは偶然じゃないかもよ？ 最初から狙っていたのかも」

「それは……あたしがあの時愛梨の傍にいても結果は同じだったかもしれないってこと？」

「そうだね。これだけ色濃く残ってるって事はその闇に取り付かれた人物が身近に居るのかもしれない」

漣芭の言葉に驚くしかなかった。

外にしか目を向けていなかったから内部の可能性を見逃していた。

「とりあえず、嫉妬、っていうのが分かったから答えは簡単そうだね。でも魂を眠らせておくほどだから大元を倒さない限りは目を覚まさないと思う」

「……探し出して」

迷うことなくその答えしかない。

あたしはそのために紅桜を手にしたのだから。

「分かった。その代わりに全てが終わったら冥界府に所属すること。それが条件だよ」

漉芭から出された提案を受け入れた。

「ありがとう、愛世。分かっただらすぐに連絡する。これ、肌身離さず付けておいて」

手渡されたのはピアスだった。

可笑しいのは片方しかないということ。

「それ、通信できるから用があつたら念じれば通じると思う。それじゃまた」

そう言つて漉芭は姿を消した。

ひとりになつて愛梨の元へと近付く。

「もうすぐだから。内部調査、しないかね」

今日はもう帰ってきてしまったし情報ももらえた。

外に出る必要はないと自室へと戻ってきた。

窓になにかが当たる音がしてカーテンを開き窓を開けると見慣れたヤツがいた。

「こんな時間になんのよう」

「愛梨のところに行っていたのか」

ベランダの柵に座る理皇の姿にため息をつく。
まさかずっとここにいたわけじゃないわよね？

「文句ある」

「いや。それよりもひとりで無茶をしていないだろうな」

「あたしがなにも出来ないことなんて貴方たちが一番分かっているはずだけど」

なんの力も持たないあたしと特別な力を持った理皇たち。

「だから聞いているんだ」

普段はほとんど表情を変えないくせに。

その場に居るだけで絵になるのは分かっているけど所詮は幼馴染。
格の違いを知る前も知った後もこいつら相手に頬を染めたことな
んで一度もない。

「なにも変わらないわ。もう遅いんだしさっさと帰りなさいよ、生徒会長様」

窓を閉めると視線を遮るようにカーテンを引いた。

たぶん出歩いていることへのけん制。

本当に煩わしいったらありゃしない。

ああ、でも敵をおびき出すために餌にはなってくれませんかもしれない。

待つだけの本能

毎日夜に出歩くのを止めた。

だって漉芭との話で身近な人間かもしれないというのが分かったから。

でもたまに紅桜が騒ぐから気晴らし程度に闇を狩る。

「愛世！」

「なに」

いきなり呼び止められてイヤイヤ立ち止まった。

追いついてきた若にがしっと両手で顔を掴まれて眉間に皺を寄せた。

「誰に貰ったの、これ！ しかも右耳だし！！」

やっぱり片方だけって意味があったのね。

漉芭に貰ったピアスは右耳につけていた。

「そんなの若に関係ないでしょ」

「おおいにあるよ。わざわざピアスホールあけたってことでしょ？
そんなに大切なヤツなの」

そこまでくいつかれる理由が分からないんだけど。

「あたしのことは放っておいて」

手を振り払うとさっさとその場を離れた。

っていつかたかだか幼馴染の癖にどこまで干渉する気なんだ。

愛梨が目覚めて復学したら絶対に転校してやる。

愛梨の部屋に向かっているとふたりのメイドが愛梨の部屋から出てきた。

あたしに気付くと一礼して横を通り過ぎていく。

ふたりをさっと観察する。

あたしたちと同年くらいで容姿も悪くはない。

「
ねえ」

声をかけるとこちらを振り返った。

ひとりはおうひとりおの陰に隠れるようにおどおどしている。

「いつも愛梨のところに来てくれているの？」

「愛梨様がいつもお目覚めになられても対処できるようにと仰せつかっておりますので」

「そう。呼び止めてごめんね」

また一礼するふたりを見送り愛梨の部屋へと入った。

いつもと部屋の空気が違う気がして換気のために窓を開けた。

空気が入れ替わったのを確認して目を閉じると界を渡った。

ゆっくり目を開けると相変わらず見事な桜が咲き乱れていた。

「久しぶり、鶴」

「ああ」

黄泉桜の木の根元に座り込む青年の傍まで歩いてくると桜の幹に触れて念じる。

「紅」

呼びかけるとふわふわした金髪に緋色の瞳の美少女が現れた。

「冥界府の人間に出会ったわ」

「そうか。出会ったか」

なぜかこのふたりに初めて会った時、初対面じゃないというぐらい懐かしさを感じていた。

まるでずっと前から知り合いだったかのように気軽に接することが出来た。

「漣芭って言うんだけど、愛梨を捕らえている闇を探してくれるって」

名を出すとふたりは納得したかのように頷いていた。

「あれもだいぶ待ち続けた。我らと同じぐらい長い長い時間」「やっと見つけたときの喜びは言葉では言い表せないほどだったからな。ただ待ち続けるだけは終わった」

懐かしむように話すふたり。

それを見ているだけでこれが当たり前の光景だと、懐かしいと思う。

「それであいつはなんて？」

「一番強く愛梨にまわりついているのは、嫉妬、の感情。それがあの子を覆っているからあたしたちの声があの子には届かないみたいだ、って。あとは今回の件が終わったら冥界府に所属することになるから」

「そういう手できおったか。しかし、妥当じゃろっ」

話しぶりから見るとどうやら漉芭とも知り合いみたい。

「ねえ、片耳のピアスってなにか意味があるの？ 若にすつこく過剰反応されたんだけど」

「それはそうじゃろう。愛する女を己の勇気と誇りを掛けて守ると言う誓いが左側のピアスに込められておって、対になった右側のピアスを女に贈る事でその意志と想いを告げたとか。それを受け取った女は、愛する男のその想いに答えると言う想いを込め、男と密接する右側に着け、告げられた想いに答えた、っというような話があるほどじゃからな」

そんな意味があったとは知らなかったけど漉芭は知っていたのかな。

知っていてあたしに片方だけ渡したのかな。

「分かったらすぐに連絡するって言った。待つだけになるけど・・・
・・・信じて、良いのよね？」

「うむ」

「あいつのことだから上手くやるだろう」

ずいぶんと信頼しているのね。

闇に取り付かれた人間がすぐ傍にいて愛梨が目覚めるのを妨げている。

その闇をもたらした感情は、嫉妬。

あの子の存在に対してか幼馴染たちに対してか。それとも両方ということだってありえる。

「天は二物を与えないとはよく聞くけどあたしのまわりは規格外ばかりだし」

「そなたもそうであろう。このはざまの空間を自由に行き来するなど人間業ではない」

気付いたら来られるようになってたんだから仕方ないでしょ。

あたしだって最初は驚いたんだから。

いろいろと話したかったことを話して自分の部屋へと繋げると戻ってきた。

「1時間、ね」

時計を確認すると先程よりも1時間経っていた。

あの場所はここと時間の感覚が違うから居座った後に帰ってくるわけっこう時間が経っていたりした。

よく騒がれたりしたけどあたしに限って誘拐とかなんてありえないし。

「早く見つかるの良いんだけど」

机の上にあがっているのはこの屋敷や周辺にいる人間たちの報告

書。

それに目を通して目星をつけてあとは漉芭の連絡を待つ。

あの子が目覚めたとしても、魅入られたのが偶然じゃないとしても。

あたしはあたしの罪を忘れてはいけない。

真実は君のなかにある

報告書から目星を付けた中にあの時愛梨の部屋の近くであったメ
イドたちも入っていた。

幼馴染がらみだとしたらあたしたちと同年代と考えるべきだと思
ったから。

「愛世」

名前を呼ばれて立ち止まると漣芭の姿があった。

気配もなく現れるからあいつらに見つからなくて良いけど。

「分かったの？」

「なんとかね」

漣芭は嬉しい報せを持ってやってきた。

だってやっとあの子を起こしてあげることが出来る。

あの子を捕らえている闇を倒してあいつらの元に返す。

「でもどうやって捕らえるつもり？　今までずっと巧妙に隠れてき
たようなやつだよ」

「だって、嫉妬、でしょ？　それが誰に対して向けられていたのか
分かれればいくらでも呼び出せるわ」

そのための困ぐらいなってもらわないと。
漣芭のもたらした情報を元に動き始める。

ターゲットの前で幼馴染たちと仲よさげにするとか本当はイヤで
仕方ないんだけど。

今回は致しかたない。

とりあえずさっさと尻尾を出せ。

うん、とりあえずあたしは物凄く頑張った。

振りまきたくもない愛想を振りまいて頑張りましたともさー!!

あいつらもなにか魂胆があるのは分かっているみたいだけど絶対に
教えない。

「そろそろ場合かもね」

「早く出て来い、まじで。愛梨が目を覚ましたら絶対に転校して
やる」

転校先はすでに候補を挙げているしばれないうちに実行する。
いろいろと裏から手は回してあるから絶対に大丈夫。

「闇は歪みから現れる、か」

本来であれば闇が人間界に出ることはありえないらしい。

冥界と人間界のはざまにある黄泉桜は浄化の力を持っていて、普通であれば黄泉桜の力によって人間界に出ることは無い。

でも黄泉桜の影響を受けずに人間界に出る方法というのが彼らが次元の歪みと呼ぶ穴。

「異世界と繋がっていたりもするから突然人が居なくなることをつちでは神隠しって言うんでしょ？実際は次元の歪みにあやまって落ちちゃって異世界に飛ばされたりするんだよ」

「なんともはた迷惑ね」

「次元の歪みがどこでいつどのようなようにして発生するかは誰にも分からない。それでも冥界府の人間としてはそれを放っておくわけにはいかないんだ。闇が地上に出たら面倒なのは愛世も身を持って知ってたでしょ？」

毎日外に出て狩ってましたから。

まさかその発生方法がそんなものだとは思いませんでしたけど。

人の心の闇を見つけて忍び寄ってくるものだとばかりと思っていた。

「ねえ、漣芭。それじゃあ愛梨やあいつらの力はなんのために生まれたもの？やっぱり闇と戦うため？」

「そうだね。家系を辿って見たけどいつの時代でも影で闇と戦っていたみたいだし」

「じゃあ……なんであたしはなにも持っていなかったのか

な

ずっと不思議に思っていたことだった。
双子の妹にはあつてあたしにはなにもない。

「……………愛世にもちゃんと力はあるよ。でも使い方を忘れちゃってるんだ」

「漉芭は知ってるんだ。紅も鶴も」

「そりゃあね。だって僕らはずっと待っていた。君と、愛世とまた出会えるのを」

あたしたちは一体どこでその絆を結んだのだろう。
とても強い糸くきずなゝが存在しているような感覚。

「愛世の魂は本当に綺麗な色をしている。なんのまじりつけもない純粋な白。だから僕たちは君が人間界に生まれ変わったのを知ることが出来た。今度こそ……………今度こそ、護るよ。ひとりで抱え込まないで僕たちを頼って」

どこか辛そうで切なそうな表情の漉芭に頷いてしまっていた。
誰かが部屋に入ってきた気配に話を止め、相手の出方を伺う。
愛梨の眠るベッドの傍に立ってじつと愛梨を見下ろしていた。
その瞳には明らかな嫉妬の感情が浮かんでいる。

「許せない。あの人の心を捉えて放さない貴方が。どうして貴方なの？ どうして貴方じゃなきゃいけないの？ 護られるだけでなにも出来ないくせに」

その人物から重く黒々しい煙のようなものがあふれ出てくる。
あれが嫉妬という感情が具現化したもの。

「あんだなんか死ねばいい。そうしたらきつとあの人だって私を見
てくれる。さつさと消えてよ！！」

人の感情は時に自分の知らないうちに牙をむく。
なんとも身勝手な理由によつて。
人を呪わば穴ふたつ。
その報いは悪いけど本人に受けてもらう。
澁芭に視線を向けると頷きあう。

「そこまでよ」

突然ぱつと明かりがついて相手は驚いた表情を見せる。
その瞳に宿るのは黒々とした嫉妬の感情。

「あんなにおどおどして人の後ろに隠れていたくせに心に抱えてる
ものは大層ね。あんな連中のどこが良いのかあたしには分からない
けど」

「あんだだつてちやほやされてる癖に!!」

冷めた目であたしは彼女を見ていた。

「馬鹿な女ね、貴方。そんな曇った目してるから見えるものも見えないのよ。あたしが幼馴染たちと距離を置いていることぐらい誰でも知っていることだわ」

「それでもあの人たちは、あの方はあんたの傍にいるじゃない！この家の娘に生まれたからってだけで特別扱いされて、無条件であの人の傍に居られて……許せない、赦せない、ユルセナイ！」

徐々に覆われて姿を変えていく彼女にあたしは哀れみしか浮かばなかった。

愛梨の部屋を傷つけるわけには行かないし早々にここから撤退してもらおう。

襲い掛かってきた闇を惹きつけるように窓を開け放つと外へと飛び出した。

漣芭に頼んであまり目立ったり騒ぎにならない場所へと移動する。

「紅桜！」

呼応するように現れた刀を手に取ると鞘を外して剣先を向ける。

「貴方がどう思おうと変わらないものは変えられないのよ。愛梨を

返してもらおう」

決着をつけましょう？

あたしが勝つてあの子を目覚めさせる。

この日のために今まで頑張ってきたのだから。

真実は君のなかにある（後書き）

ようやく黒幕登場です。誰だかもう分かりですね；

解放の合図

きいんつと金属がなにかを弾く音が響く。

人の心をつらぬくだけあって今まで戦ってきた闇とは全然違う。

「とつととくたばりなさいよね！」

ここまで堕ちて元通りに戻れるのかしらね、この子。
でもあたしには負けるわけには行かない理由がある。

「思いの強さであんたなんかには負けるか・・・自分ではなにも出来ずに見ているしかできなくて、それを愛梨に向けたあんたなんか・・・」

この子とあたしは似ていた。違いは、嫉妬、という感情を持ち、愛梨に向けたこと。

「ゆるさない、ゆるさない、ゆるさない・・・」

完全に闇に囚われている。愛梨ならきつとこの子も助けたいと願うんだろうけどあたしはそこまで優しくない。

罪は罪だ。それは自分自身で償ってもらおう。

闇が彷徨する。空気が震えるのを感じて思いつきり後ろに引いた。あたしが立っていた場所は大きく陥没していた。

「愛世、彼らが気付いたみたいだよ」

「そう・・・」

近隣に潜む闇を捕食して徐々に大きくなっているというなんてたちの悪い闇。

これだけの闇なら気付かないはずはないよね。

「どつする？」

「どうもしない。あたしはあいつらに愛梨を返して終わり。」

ねえ？貴方の惚れた人がここに向かっていているそうよ。

貴方のその姿を見てどう思つかしら。あいつらにとって闇は敵ではないのに。

「思い知れ、あんたが引き起こしたことなんだから」

こつちに来るっていうなら大いに活躍してもらおうじゃないのよ。捕食し続ける闇にあの子が持つかも時間の問題。

「このままじゃ、本当に堕ちて戻れなくなるわよ」

「愛世も優しいね。あんなことになっても彼女の心配するなんて」
「心配なんてしてないわ。なんか後味悪いでしょ」

元に戻れても記憶を消されていられなくなる。
きっと想い人への思いも消されてしまうのだろう。それが引き金になったのだから。

「愛世!？」

「な、なんで……」

やってきた幼馴染たちの姿にわずかに動揺したのが見えた。
それを見逃さずに間合いを詰めると闇を斬った手ごたえはあった。
よほどシヨックだった見たいね、その姿を見られたこと。

「愛世様に近寄らないでちょうだい、この下郎がつ!！」

どすのきいた声と共にメイド服を来た少女が華麗なとび蹴りをくらわせた。

思いつきり腕を引かれたかと思うと漣芭の腕の中にいて闇が地に伏すのを見ていた。

あのままの位置だったら粉塵にまかれていたかもしれない。

「ありがとう、漣芭」

「いいよ。愛世がいるのに思いつきり蹴った奴が悪いんだから」

すたつと着地したかと思うと物凄い勢いで走ってきた。
目星を付けていたもう一人のメイドだった。

「愛世様、ご無事ですか!!? お怪我はありませんか!?!」

「あ、あたしは大丈夫だけど。貴方も・・・関係者、だったの?」

「またこうして貴方様のお傍に仕えさせていただけるとを本当に嬉しく思います」

今にも泣きそうな表情でがしいつと力強く手を握られた。

「漣芭、愛世様からさっさと離れなさい!」

あの闇を始末しなきゃいけないからそろそろ放してくれると嬉しい。

そう言おうとしたら一度強く抱きしめられたかと思うと潔く放された。

「なにがしたいの?」

「なんとなく」

勝ち誇ったような表情をしているけど訳を聞くつもりはない。
なんとなく幼馴染たちが関わってそうでイヤだ。

「さっさとあれを返しなさいよ。あんたの仕事でしょ」
「はいはい」と

すたすたと漣芭が闇に近付いていくので後を追う。
紅桜は浄化の刀だから闇を浄化出来るけどここまで大きくなったものは専門家に任せただ方がいい。

「開け、冥界の門」

地面の手をついた漣芭の言葉に呼応するように地面の一部が揺らいだのが見えた。

漣芭が手をついていた地面に複雑な文様の描かれた枠で囲まれた円形の穴が現れる。それからは一瞬の出来事だった。

なにか無数の黒い手のようなものが穴の中から出てくると闇を掴み少女から引き離すと引きずり込んでいった。

完全に闇を引きずり込むと穴は閉じ、あの少女が倒れているだけ。

「愛世」

「それ以上近寄らないで」

歩み寄ってこようとした理皇をとめた。

「これで愛梨が目覚める。あんたたちに確かに返したから」

あたしが闇と戦ってきた理由は愛梨を幼馴染たちに返すため。

それも今日で終わるだろう。そしたら秘密裏に進めてきた転校の話を実行にする。

「それ、どういうこと？」

「今まで発生していた闇を倒していたのが貴方だということですね？」

「愛梨を捕らえている闇を見つけるにはそれしか方法がなかった。

まあ見つけたのは漉芭だけど」

顔を合わせればいつも重く重しい雰囲気になる。

嫌いじゃないけど傍にいたいとも思わないっていうか。

「その者たちとはいつから知り合いなのだ」

なんでそんなことまで答えなきゃいけないのかしらね、あんたらはあたしの保護者が。

「さあ？ だってあたしはそこまで知らないわ」

「覚えていなくていいんだ。君をまた失うことになったら僕たちは神さえも殺せる」

「私たちが覚えておりますから。待ち続けるだけはもう終わりました

た。これからはずっとお傍でお守りいたします。あのような思いは一度で十分です」

なんとなくだけどニユアンズで分かることは、とてつもなく長い間、あたしが生まれ変わるのを漉芭たちは諦めることなく待ち続けた。

前世とかそういう繋がりだと思うけど、話したまらないのなら無理には聞かない。

「ですから愛梨様を貴方がたにお返ししたら、愛世様は私が頂きます！」

「ちょっと神流、最後に出てきたくせに生意気なんじゃないの？」

よく分かんないけど漉芭たちというの方が心休まるんだもん。懐かしいって思うことがたまにある。

「あのさ、そろそろ家に帰りたいんだけど。愛梨がちゃんと目覚めてる確認したいし」

「はい、愛世様！」

「そうだね、そろそろ目が覚めてるかもしれないね」

倒れている子は若の影にでも任しておけばちゃんとした処置をしてくれるだろう。

ちらりと横目で幼馴染たちを見てから走り出した。

あの子が目覚めているように、祈りを込めて。

苦しませていめんね

外に出たときと同じように窓から愛梨の部屋へと飛び込んだ。
呼吸を整えながらゆっくりと愛梨の眠るベッドへと近付いていく。

「愛梨」

ねえ、お願いだから目を覚まして。
祈るように愛梨の左手を握ってその時間を待つ。

「朝……?」

窓の外が徐々に明るくなり始める。

「ねえ、愛梨。朝よ」

昔はこうしてふたりで朝を迎えていたよね。
怖がりな愛梨はよくあたしのベッドに潜り込んできて眠るまです
っと手を繋いでいた。
ごめんね、変わったのはあたしなんだ。

「愛、世、ちゃ……?」
「! つ……愛梨!」

まだ眠そうに瞬きを繰り返している。けど、ちゃんと目を覚ました。

朝はまだ早いけど愛梨が目覚めたことを知らせてこなくちゃ。握っていた手を離そうとしたら強く、握り返された。

「愛梨?」

「もう少し、傍にいて?」

子供みたいにそういう愛梨に肩の力が抜けた。

「ええ」

「愛世様、私が伝えてまいります」

「そう? じゃあお願いするわ」

たぶん同じように窓から入ってきた彼女は部屋の扉から出ていった。

「……ごめんね、愛梨」

「どうして愛世ちゃんが謝るの?」

「あたしのせいだから」

例え愛梨がそんなことはないと言ってもあたしの中ではもう今回の件はあたしの罪なのだ。

両親から大切な娘を、彼らから大切な幼馴染を奪った。

「愛世ちゃんはなにも悪くないわ」

「愛梨ならそういうと思った。今度は絶対にあいつらの傍を離れちゃ駄目よ。あいつらの役目は貴方を護ることなんだから」

これで全て元通りになる。愛梨がいればあたしはいなくても大丈夫。夫。

優しく頭を撫でると繋がれている手を離れた。

「部屋に戻るわ。一睡もしてないのよ」

「愛世ちゃん」

窓から部屋を出ようとしたあたしを愛梨が呼び止めた。

「なに？」

「ごめんね」

その意味を聞かずに首を横に振った。

「おやすみ」

それだけ言い残すと自分の部屋の前まで行くと窓から中に入った。

「愛世」

「どうしたの？ 漉芭」

部屋に入ると漉芭が待っていた。普通なら不法侵入だけどまあ別にいつかって程度。

幼馴染たちより他人じゃない気がするから。

「お疲れさま」

言われた言葉に僅かに目を見開いた。

「・・・ありがとう。漉芭にもいろいろ調べてもらったりしたから今度なにかお礼するわ。考えておいて」

「なんでもいいの？」

「ええ」

とても嬉しそうに漉芭が笑うのでつられてあたしもふっと笑った。ああ、鶴にもちゃんとならせなくちゃ。

「これで心配事はひとつ減ったね」

「ええ。あとは転校先かしら」

愛梨が目覚めたということはあたしの心配事がひとつ減ったという事だからもういいだろう。

ひとり暮らしももしかしたら許してもらえるかな？

学費だってアルバイトをして自分で出したっていい。

「冥界府への所属も忘れないでね？ 今度書類持ってくるから」

「分かっているけど、実際は何をすればいいの？」

「………愛世にも力があるって言ったよね？」

「ええ」

あたしはその力の使いかたを忘れていただけだって。

「ただ僕は……愛世がそれを使うことは本当はイヤだ。けど、君じゃなきゃできないから……」

「教えて、漣芭。あたしに出来ることがあるのなら、やってみたい」

もう逃げ続けるわけには行かないから自分に出来ることならやりたい。

「本当に？」
「ええ」

決心が変わらないことを分かったのかため息をついた。
そして手を、差し伸べてきた。

「鵜のここに行こう。ここだったらいつ邪魔が入るか分からないか
ら」
「ええ」

漉芭の手を掴むと界を越えてはざまへとやってくる。

「鵜、終わったわ」

相変わらず黄泉桜の下でくつろいでいる鵜に結果を伝える。

「そうか。よく頑張ったな」
「ありがとう」

あのメイドさんは連れてこなくてもよかったのかな。一応関係者
なのよね？

「久しぶりだね、鶴」

「ああ。お前も変わらないな」

「変わるはずがないよ。そのまま待つことを望んだんだ。神流もいた。愛世の家でメイドとして働いてたよ」

そろそろ話が繋がるように教えて欲しいんだけど。

あたしが一体どんな力を持っていて、なぜ彼らがあたしのことを待っていたのか。

「我はあの刀で眠ることを選び、鶴は黄泉桜の番人としてここで暮らすことを選んだのじゃったな。漉芭は魂の向かう場所である冥界へと降り、神流は人として生きることを決めた」

「紅」

なんだかこれが当たり前のような感覚。いつもすぐ傍にあったような懐かしさ。

それほど前のあたしと彼らの間に結ばれた絆は強かったのかもしれない。

「それじゃあ……話をしようか、愛世」

「ええ、お願い」

黄泉桜の下へと集まると漉芭はあたしの力に関して話し始めた。

「前に闇が現れる原因について話したよね」

「ええ。次元の歪みというものが関係しているんでしょ？」

「次元の歪みを閉じるには縫合という能力が必要になる。けど、この世界には存在していない能力なんだ」

次元の歪みって穴なんでしょ？

それをその縫合とかいう能力を使って縫い合わせるってこと？

けどその能力を持っている人がこの人間界にはいないから闇が溢れ放題だったと。

「愛世はその、縫合の能力の持ち主なんだ」

「だって今人間界には存在していないって……」

そう返せばみんな一様に辛そうな表情を見せた。

「縫合の能力を持つ一族が暮らしていたのは、天上界。天上界では縫合師って呼ばれていた。次元の歪みはどこにでも現れるもので、縫合師はその歪みの現れる場所を予測できる。縫合に使われるのは念糸というもので、それも縫合師しか持ち得ない能力」

「つまりあたしはその縫合師しか使えないはずの能力が使えるってことなのね。血を継いでいるとかそんな簡単なものじゃ、ないんでしょ？」

漉芭は頷くとどこか遠くへと思いをはせるように目を細める。

「僕たちも元は天上界で暮らしていた。そこでいつもある人物と一緒にいた。彼女は縫合師の一族の出身で、とても優秀で人望もあつた。けど……とある事故に巻き込まれて帰らぬ人になった。どんなに待っても彼女が生まれ変わったという報告はなかった。だから僕たちはね、彼女が生まれ変わってもまた彼女の元に集えるようにと全員天上界から降りた。愛世は……彼女の生まれ変わらなかった」

どれほどの長い時間を彼らは待ち続けたのだろうか。

「……ごめん」

「どうしてお前が謝る。俺たちはただお前を待っていたかっただけだ」

待つだけの時間の辛さを知ってしまったから。

けれどいつどこで生まれ変わるかなんて誰にも分かるはずがなく、きつとあたしが思うよりもずっと長い時間を待ち続けたのだろう。

「僕と鶴は愛世の副官で、紅は護衛で、神流は愛世の侍女だった」「え、紅が護衛？」

「うむ。だからなぜ護れなかったのかとあの時は本当に悔やんだものじゃ……じゃが今は紅桜として常に愛世の傍におれるのじやからよしとしよう」

「本当は話すつもりはなかったんだ。きつと余計に気にしちゃうん

じゃないかと思って」

うん、まあ引きずっちゃうタイプなんだけどね。

あたしはそれを受け止めてこれから頑張っていかなきゃいけない。自分に出れることはするって決めたんだから。

それからいろいろな話を聞いているとあつという間に時間が経ってしまつて愛梨のことも心配だしと戻れば起きる時間にはちょうどいい時間へとなっていた。

愛梨が目覚めたことへの喜びが屋敷を包んでいた。もう少し休んでも罰は当たらないだろう。

長期的戦略実行中

パーティー会場は人で溢れかえっている。

こつという場所も苦手なだけでまあ仕方ない。なにせ今日は愛梨とあたしの誕生日だった。

それでも主役は愛梨だけでいいといつもあたしは壁の花を決め込む。

「愛世様」

「神流、今日は大変そうね」

「まったくです！ 愛世様のお傍にいたいのに」

うちでメイドとして働いている神流は朝から慌しく動き回っているのを見ていた。

ドレスなんか着ないって言ったのに愛梨と色違いのを無理やり着せられたり。

多少のセクハラは見逃したのよ？ これでも。

「愛世」

漉芭が気配もなく隣へと現れた。僅かに視線をやれば紅もいるし鶴も出てきていた。

「大集合？」

「ここではなく愛世の部屋へ直接祝いに行くつもりだったんだがな」
「たまにはパーツと出ても構わんじやろ。どうせ我と鶯は他には見えんようになつておる」

あ、そうなんだ。

じゃあ現在見えてるのはあたしと漉芭ってことね。

これで漉芭も見えてないとか言ったらあたしが変な人じゃないのよ。

「妹はまだ来てないの？」

「まさか。あの人だからの向こうよ」

愛梨が目覚めたことで今回のパーティーはいつもよりも人が多いように見える。

相変わらず周りには人ばかりでその姿さえ見えはしない。

「浄化の力を持つ聖女、か」

冥界にとつてもその力は重宝されるのよね？

闇を浄化できる力をもっているんだもの。

あたしはというと漉芭や鶯たちに見てもらいながら自分の能力について勉強し始めていた。

「そついえば転校先決まったって？」

「ええ。まだばれていないからこのまま上手く行くと思うの」

本気で転校が決まっている。

と言ってもちちゃんと学期が終わるまではいるつもり。

さすがに一人暮らしは無理だった。

愛梨が目覚めた翌日は大騒ぎでまるでお祭りでも起きてるんじゃないかと思うほどだった。

それほど愛梨が目覚めたことが嬉しかったのは分かるんだけどね。やっぱりあたしはそれを遠目から眺めているだけ。

「抜け出す？」

「ん」

ま、今日ぐらいあたしがいなくてもなんとかなるでしょ。

差し出された漣芭の手を掴んでこっそりと消えようとした。

「愛世ちゃん」

聞こえてきた声にわずかに眉を上げる。

まるで呼んだように来るってどういうこと。あんなに囲まれてたのじ。

「どう行くの？」

はあああつとため息をつくと振り返った。
愛梨だけではなく幼馴染たちまでそろっていた。

「ちょっと外に」

「そいつと一緒にか？」

「目ざといね。今日は愛世の誕生日だし好きにさせてもいいんじゃないの？」

「今日だから、だけど？」

「主役を連れ出されては困ります」

いやいや、愛梨さえいればお客は全員満足するから。
別にあたしがいなくても誰も気付かないから。

「あのね、愛世ちゃん。お父さんがね、一緒にいる人が誰か物凄く気になってるみたいなの」

「だって、漣芭」

「ん？ 挨拶してこようか？」

「もし聞かれたら答えるからいい」

そこへばたばたと私服に着替えたらしい神流が走りこんできた。

「愛世様ああ！！ 今日のお仕事終わりました！」

普通にしているとね、神流は綺麗なほうにはいると思うのよ。けど見た目と中身が一致してないっていうね。

口を開かなければ絶対にモテると思うんだけど、言動が暴走気味だ。あたしのせいだけだ。

「そう、お疲れ様。神流」

「はい！ というわけで行きましょう、愛世様。このような場は昔から苦手でしたよね」

外見年齢は若い年ぐらいなのに魂年齢はその何十倍？何百倍？昔からこういう場が苦手だったんだと苦笑してしまう。

「私も行きたい！」

「駄目。愛梨はここにいなさい。大丈夫よ、ちゃんと家に帰ってくるから」

ひらひらと手を振ると漣芭と神流と共に歩き出した。

後ろでふくれっ面をしている愛梨は幼馴染たちが慰めるだろう。

やっぱりそう簡単に開いた溝は埋まるわけないでしょ。

あたしにも力があるんだって分かったって、幼い頃に心に出来た傷はそう簡単にふさがらない。

だからあたしは、逃げることは止めるけど自分から近付いたりは絶対にしない。

これからは少しずつ、少しずつ、愛梨たちと向き合っていくこと

思ひ。
どんなに時間がかかってもね。

長期的戦略実行中（後書き）

これにて第一章完結とさせていただきます！

愛世の心の中で少しずつ変わり始めたところです。

第二章に関しては頭の中でなんとか構想は出来ているのですが、まとめるまでに時間がかかりそう＆ほかに手を付けているお話がある程度進むまで一旦完結済みとさせていただきます。と思います。

書いている本人が気付いていないことや読んでいて疑問に思ったことなどありましたら拍手や感想などで教えていただけますと嬉しいです・・・！！

ここまでお付き合いいただきありがとうございます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7931u/>

黄泉桜

2011年11月4日19時47分発行